

論文の概要および審査結果の要旨

氏 名（本 籍）	鈴木 康広（愛知県）
学 位 の 種 類	博士（教育学）
学 位 記 番 号	乙第2号
学位授与の日付	平成25年5月8日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学 位 論 文 題 目	心理療法における宗教性について
論 文 審 査 委 員	主査 東山 弘子（佛教大学教授） 副査 石原 宏（佛教大学准教授） 副査 樋口 和彦（同志社大学名誉教授）

〔1〕論文の概要

本論文は、著者がスイスにおいて修得したユング派の心理療法理論と、日本人に対する心理療法実践における臨床的事実を、「宗教（宗教性）」を一つの結節点として、ユング派の心理療法で用いられる「拡充法」を用いて、「集合的（普遍的）無意識」の層から統合的に考察しようとする試みである。

本論文は、2部から構成されている。第一部「宗教と心理学：宗教的啓示と心理学的洞察対話」では、宗教と心理学の共通性に関する理論的考察が扱われている。第二部「心理療法における宗教性について：事例研究を中心にして」では、5つの臨床事例を通して心理療法における宗教性について考察が行われている。

第一部第一章は、宗教における「啓示」の問題が取り扱われている。第1節では、シャカムニが“ブッダ”になった瞬間、つまりシャカムニが菩提樹下で悟りを得た瞬間について、エリアーデの論考をもとに考察し、悟りの体験、「光」に出会う体験が、「究極の实在との出会い」であり、心理学的には「洞察」を得ること、や「自己（セルフ）」に出会うことと照応していることが示唆されている。

第2節では、「二元論の源流」「善と悪の源」としてズルワーン Zurvan 神話（オフルマズド、アフリマンの誕生）が例示され、神話に見られる「善と悪」の相容れ

ない二様相の逆説的共存という宗教的テーマが、心理学的には「善と悪、意識と無意識、自我と自己の間のダイナミズム」によって促進される「個性化のプロセス」と共通性を持つことが示唆された。続いて、グノーシス派神話に見られる「記憶喪失」と「記憶回復」のテーマ、および「救済された救済者」のテーマが例示され、この宗教的テーマが、心理療法のプロセスにおける「無意識を意識化して洞察を得る」こと、および「傷ついた治療者」のイメージと相同性を持つことが示唆されている。

第3節では、「対立するものの一致」を象徴するミトラ教の神「アイオーン像」についての考察が展開されている。そこでは、アイオーン像における対立するものの一致を理解することが、ユング心理学における「意識と無意識、自我（エゴ）と自己（セルフ）」という対立するものの一致をよりイメージを膨らませて理解する助けとなり、またアイオーン像に内在する「変容する可能性 potential」が、心理療法の目標としての「人格の変容」を体現するという点で、アイオーン像の重要性が指摘されている。

第4節では、加藤清の「サイケデリック現象」に関する論考が取り上げられ、薬物によって起きる心理現象と坐禅によって起きる心理現象の対比を通して、宗教的テーマとしての悟りと、心理学的テーマとしての無意識の意識化、個性化のプロセスの類似性が議論されている。

第5節は、第一部第一章全体の討論という性格をもった節であり、「①光、②対象からの意識の離脱（無意識の理解）、③禅、④心理療法、⑤一なる宇宙」という5つのテーマに対するユングの論考を縦横に引用し、それぞれのテーマが、ユング心理学的観点から位置づけられている。

第一部第二章は、心理学における「洞察」の問題が取り扱われている。第1節から第4節では、「悟り」についてのユングの論考をもとに考察が展開されている。とくにユング心理学の観点から見た場合、「悟り」が「自我という形態に限定されている意識が、自我性をもたない本来的自己へと突破すること」であることが強調されている。また、禅において、悟りを得た後にその体験を長く育てていくことを意味する「悟後の長養」という概念を取り上げ、これが「洞察」を得た後に「徹底操作」の長いプロセスを必要とする心理療法と対比して理解することの重要性が指摘されている。

第5節では、第一章と第二章のここまでの議論から、宗教における「三つの段階」、すなわち、「覚醒し、救いをもたらす知識の啓示があり、記憶回復 anamnesis に至る」プロセスが、心理療法における「洞察（＝覚醒、救いをもたらす知識の啓示）」

と「徹底操作（＝記憶回復）」に照応することが述べられ、宗教的体験と心理療法における心理的体験の相同性が再び強調されている。

第6節以降は、宗教的体験と心理療法における心理的体験の相同性を例証するように、宗教における重要概念と心理療法における重要概念が順に取り上げられ、宗教的概念には心理学的概念からの考察が、心理学的概念には宗教的概念からの考察が行われている。具体的には、「一なる宇宙／中心力／仏性」「悟り」「洞察」「カイロス」「共時性」「傷ついた治療者」「自我（エゴ）」が取り上げられ、それぞれの概念が宗教的にも心理学的にも理解し得る概念であり、また心理療法の実践に直結する概念になり得ることが示されている。

第一部第三章は、第一部の「結論」であるが、ここまでの議論の単なる総括にとどまらず、第一部で議論された宗教と心理療法の相同性のテーマに、西洋と日本という対比軸を加えた考察が展開されている。ここでは、河合隼雄の論考が中心的に取り上げられ、西洋心理療法家の「自我＝中心的」なあり方と日本人心理療法家の「自己＝中心的」なあり方の対比という著者独自の考察に至っている。

第二部第一章は、「事例研究」であり、著者自身の5つの事例が提示されている。事例一は、「夢分析と箱庭療法を併用して、個性化のプロセスを歩むことで抑鬱状態より回復した中年女性」、事例二は、「夢分析と描画療法を併用して、鬱病より回復した30歳代女性」、事例三は、「抑鬱を主訴に来談された中年女性の箱庭療法におけるイニシエーション過程」、事例四は、「不登校を契機に事例化した14歳の統合失調症のケース」、事例五は、「回復しナラティブに自らを振り返った境界性人格障害のケース」である。それぞれの事例が、大部の実践記録となっており、個別的な生を生きるそれぞれのクライアントの圧倒的な心の世界が描き出されている。それぞれの事例の展開の中で見られた「宗教性」のテーマを、第一部での議論に沿って事例の考察が行われており、心理療法の実践事例において、いかにクライアントが「宗教性」と取り組み、心理療法家が「宗教性」を念頭におきながら実践を行っているのかが、例示されている。

第二部第二章は、「結語」であり、第一部での議論と第二部での事例検討を踏まえた総合考察が行われる。宗教が、「ラテン語で re-ligio、“再び結びつく（つながる）” ことであり、〈忘れられたもの〉を思い出す anamnesis である」ことを再度取り上げ、「“再びつながる” ことによる“一体感の回復” が宗教の原義であり、心理療法の奥義であるかもしれない」と結論づけられている。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文は、心理療法実践における宗教性について論じた二部構成の学術論文である。

第一部では、心理学における宗教について、心理学的洞察と宗教的啓示との対話という視点から、インドをはじめ多様な宗教における啓示的体験について広く文献を渉猟して比較検討している。ユングの見解を縦横に参照しつつ、こうした体験を多角的視点から検証している点が評価された。

第二部では、心理療法実践における宗教性について、臨床事例研究を中心として詳細に論じている。夢、描画、箱庭のイメージ系列を含めてユング派の心理療法理論に基づいて分析的検討がなされた5つの臨床事例から、心理療法における宗教性を見事に浮かび上がらせており、人間の心の内奥に迫る論考がなされている。とくに事例一から事例三では、西洋の地で暮らす日本人が文化的な違いに直面することで抱え込むことになる葛藤をワークスルー過程において“再び結びつく（つながる）”ことを本質とする「宗教性」の体験がいかに重要になってくるかを、クライエントの生身から湧き起ってきた迫力のある表現の変遷を通して記述しており、本論文に結実した論考の源が、これらの臨床事例体験にあることを十分に納得させるものとなっている。こうした臨床事実裏打ちされることによって、第一部の理論的考察において主張されたことが改めて深く理解される構成になっており、この点もまた評価された。

なお、平成25年1月17日に行われた論文内容に関する口頭試問においては、「宗教」と「宗教性」の違いに関する明確な考察が不足する点、本論文で示された考察の適用範囲の明確化や妥当性に関する議論および第二部に例示された5つの臨床事例を取り上げることの必然性に関する議論など研究成果の一般化に対するセンシビリティが不足している点について、今後の課題として改善努力することを求めるコメントもあったが、国際的な研究の乏しい本邦の心理療法実践に関する研究の現状の中で、スイスの地に実際に身をおいて修得した心理療法理論と、日本人に対する心理療法実践の現実を突き合わせ洋の東西の別を越えた人間の心の根本に共通して存在する「宗教性」という観点から統合的な考察を試みた点を評価し、本論文を博士（教育学）の学位論文として価値のあるものとして、合格と認めた。